昭和61年7月1日発行　(財)高知市文化振興事業団

文化高知 12

自由民権記念館への期待

関田英里

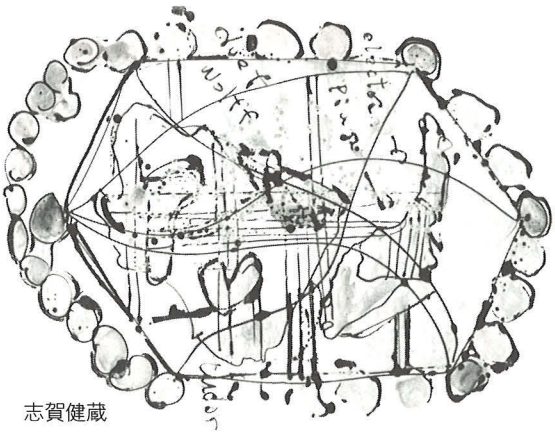
三年ほど前、鹿児島に行った。三度目だったが、前二度はトンボ帰りで、見学の余裕などなかった。今度は午後の半日ほど市内観光の時間がとれた。しかし、私の日頃の精進が悪かったからか、折角のその午後は、あいにくと〝春一番〟のかなり激しい雨となり、噴煙をあげているはずの桜島も厚い雨雲に覆われてまるで見えなかった。

車をとめて、濡れた窓ガラス越しに眺めたり、小降りになると車から出て傘をさして歩いたり、ともかく雨のなか、市内の史跡を巡った。

加治屋町、西郷隆盛・大久保利通・東郷平八郎・大山巌他多数の偉人が続出したところ。私学校跡、西郷党の教育・訓練機関のあったところ。城山、西郷終焉の地。南洲墓地。南洲神社。西郷南洲顕彰館。その他。ザビエル記念堂などの史跡も見るには見たのだが――。

そこで私は、鹿児島と高知との大きな違いをまざまざと感じた。ちょうどその頃、「高知市に自由民権記念館を建てよう」という運動が始まっており、私もいささかそれにかかわっていたからでもあった。

鹿児島は偉人を生んだ土地だということを売り物にしている。まず、何と言っても西郷隆盛（セゴドン）だが、セゴドンに続いては維新の功臣、明治政府の高官、陸海軍の大将・元帥たちである。偉人というのは旧大日本帝国の権力の中枢に立っていた人々のことなのである。



志賀健蔵

高知では、市内の史跡でも、坂本龍馬生家跡などいろいろあるが、一番多いのは、植木枝盛旧宅とか、坂垣退助・片岡健吉・馬場辰猪・中江兆民等々の誕生地、立志社をはじめ各民権結社の所在地跡とか、その他、もろもろの自由民権関係のものである。高知での近代史上の著名人は、みな民衆―明治の用語では人民―とともに、自由のために権力の圧制とたたかった人々なのである。その象徴が高知公園の坂垣退助の銅像と言えようか。

明治の専制権力に対して、高知は鹿児島とはまるきり違うのである。それは史跡だけの問題ではなく、〝歴史的風土〟ともいうべきものとなって、現代を生きる人間にも深いかかわりを持っているのだと思う。

土佐の自由民権家の先駆性とその理論水準の抜群の高さに異論をはさむ者はまずいない。しかし、学界には以前から、「立志社流の士族民権」というレッテルを貼って、高知における運動の国民的大衆性を認めようとしない偏見があり、それはまだ消えていない。

しかし、立志社の士族に発した自由民権の思想・運動だが、その後、幅を広げ、深さを増して、高知県内のあらゆる階層、あらゆる地域に拡がって、草の根から全県土を揺がせ、さらに全日本に波及して行ったのである。まさに「自由は土佐の山間より発したり」である。

自由民権記念館が、高知市制百周年を記念して建設されることへの期待は大きい。

（高知大学学長）

提案漫画美術館

やなせ　たかし

文化高知に「美術館を考える」というタイトルで竹村文男氏がかいておられたが、ぼくも読んで同感したり、おどろいたりした。

へえー、美術館がないのは青森と高知だけかと仰天した。

青森と高知以外には全部美術館があるということにむしろびっくりした。

今は凄い時代なんだなあ、一県毎に美術館があるとはさすが日本は文化国家だ。

美術館が無い高知は恥かしいことになる。文化高知というタイトルは非文化高知と変えなくてはいけない。

四国四県の中でも肩身がせまい。

四国架橋も目前に迫ったし、拙くするとまた避遠の地にされてしまう恐れがある。

しかし、高知空港もおくればせながら、ジェット化されたのだから、ここから出発して四国山脈を越える観光ルートを設定すればいい。

たとえばドイツのメルヘン街道みたいに、龍馬ロマンチックロードとか、うまいネーミングとプランはいくらでも可能だ。

高知は大酒のみとヤクザだけが有名というのは困る。本当にあれはいやだなあ。

ところで、さてさて、美術館のことだけれど、これだけ各県美術館が乱立している時に似たようなものを建ててもしようがない。

「土佐にも美術館があるぜよ」

といったところで観光客は一人も来ない。自己満足で、開会式に知事がテープカットして県内有名文化人が祝辞を言ったら、あとは閑古鳥が鳴くだけのことになる。

まして、大金を投じてマイナーの外国画家の絵を買ってきたりするのは愚の骨頂だ。

たまたま山梨県のミレーは当ったけど、あれは眼のつけどころがよかった。

高知の美術館は漫画を中心にすればいい。何故なら、高知は日本有数の漫画家輩出の県で、これは天下に鳴りひびいている。

ざっと思い浮べるだけでも一〇人ぐらいいる。他の県は一人いれば大騒ぎで（例えば大分の富永一朗）ゼロのところが大部分だ。

昔でいえば川柳漫画の谷脇素文がいる。横山兄弟、近藤日出造（隆一の義弟）と並べてくると一県で日本の漫画史が編めるくらいだ。それなのに、銅像ひとつ、記念碑ひとつ無い。他の県では県出身の詩人・文人の碑はものすごく多い。岩手県の啄木・賢治はともかくとして、岡山県の夢二美術館も相当なものだ。

漫画家の碑とか、記念館とか、美術館は例が無いきに、という人がいるが、そういう人は既成概念にしばられている。

無いからいいではないか。真似する方がはるかに恥かしい。まして血税？億かけて外国の骨董美術を買い漁るなどは浅ましい。

今は明治文明開化の時代とはちがうぜよ。地方行政は全く独自の道をきりひらかなくてどうする。カンヌの音楽祭のように、高知漫画祭を国際イベントとしてやるのだ。

そうすれば、全世界に名前がとどろくことになる。そして地方経済は活性化する。

外国の美術館には中々ユニークなものがある。そして、ヨーロッパの小美術館では漫画とファインアートを区別していないところが多い。おなじランクになっている。

漫画集も美術書の棚に並んでいる。

なぜなら、ユーモアはむしろハイブローで裸婦や、花や、鶴に日の出なんてのは成金趣味でダサイのだ。知的情感が欠落している。

今はイラストレーションとかファインアートとか、カートーンとか区別する時代じゃない。古典は古典として鑑賞し、大切に保存し、眼は未来にむかっている方がいい。

それが土佐魂ちゅうもんやないかとアシらは思うが、どうぜよ。

資金はどうする？。

やる気になれば、金はどうにかなる。

人生意気に感ずという金持も一肌ぬぐことになるかもしれん。美術館だって利益はあげ得る。それは企画と運営だ。もうかるということになれば多少の投資は必要だ。その経営努力と先見なくして、ただ文化文化と騒ぐのは見苦しい。

しかし、もし漫画美術館が実現すれば、悪口と反対意見は雨アラレの如く降りそそぐことは当事者は覚悟しなくてはいけない。

新鮮で冒険的な企画の宿命じゃき、まっことヤチがない。おんちゃん、おまんらどう思うぜよ。

（漫画家・東京在住）

古代へのロマン

山本　哲也

高知市の北方に、愛宕山という小高い山がある。この山に登ると、秦地区を一望することができる。私の住む前里は、愛宕山の北東で、秦地区の一角にあたる。

愛宕山から秦地区を見渡すと、密集した住宅地の間に、ブロック状に水田や畑地が点在していることに気づく。今から十数年前までは、もっと広々とした水田や畑地があり、環境の変化の激しさを改めて思い知らされる。なにげなく、景色を眺めているうちに、ふと、古代の秦地区について思いをはせることになった。

秦地区には、古墳時代後期の古墳が十二基程築かれていたことが知られている。愛宕山、北秦泉寺、宇津野等には、現在でも古墳の一部が残っており、北秦泉寺の吉弘古墳では、古墳の石室を見ることができる。秦地区に残る古墳は、横穴式石室をもつもので、古代の豪族の奥津城である。秦地区に残るこれらの古墳からは、荒地を開拓し、豊かな実りをもたらす土地を広げるに至った、先人達の苦労の跡がうかがわれる。また、黄金色に輝く稲穂を刈りとる人々の姿が想像される。おそらく、集落跡の近くには、水田や畑が一面に広がっていたことであろう。

愛宕山のすぐ近くの、中秦泉寺には、秦泉寺廃寺跡と呼ばれる奈良時代の寺院址がある。秦泉寺の地名の由来が、この古代寺院によるものであるかどうかは定かではないが、奈良時代になって、仏教を受容し、寺院を建立することのできた地域が、この秦地区であったことは興味深い。古墳時代後期に、多くの古墳を築くことのできた集団がいたことは、秦地区が当時の先進地であったことを示すものであろうし、同時に、古代寺院が建てられる基盤が存在していたことが考えられるのである。

愛宕山から眺める風景は、これからも年々移り変わっていくことだろう。しかし、大地に眠る古代のロマンは、変わることなく夢を語りかけてくれる。

私達が生活している身近なところに、案外多くのロマンが埋もれている。古代のことを考えながら、家々の屋根を見つめていると、その風景が、黄金色の稲穂が続く水田に見えたり、眼下に荘厳な寺院が建っていたりするのである。また、どこからともなく、天平の鐘の音が聞こえてきたような思いがするのである。

（公務員）

高知で思ったこと

久田貴志子

新聞記者の私にとって、文化とはすなわち人である。一人ひとりに直接会って、喜びや悲しみのドラマを引き出す仕事だ。私は精一杯、相手の気持ちをくみ取ろうとしてみる。しかし時折、「お前は所詮、ヨソ者じゃないか」という声が私の背中に投げかけられ、私は自分の無力さを感じさせられる。

今の私の主な仕事は、警察を回ったり、催し物などを取材することだ。そこで出合う、たいていの高知人は私にむかって「どこの産」と質問する。最初に聞かれた時は面喰ったが、一瞬考えて「出身地はどこですか」と聞かれているのだとわかった。

「富山県です」

「ほう、富山で薬、売っとったがか」

「いいえ、毎日油売ってました」

と、こういう具合。これが一人や二人ならどうということはない。ところが、どこへ行っても必ず、あの独特の言い回しで聞かれるのだ。そして、その後には高知人の気質の説明が続けられる。

「高知人は酒もよう飲むし、気性が荒いから気をつけなあかん」

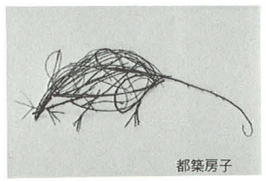
「はあ」

私は半信半疑で返事しながら、心の中では「でも、東京のサラリーマンの方がもっと飲んでるような気もするし、スペイン人の感情の起伏の激しさに比べれば高知はまだおとなしいかもしれない」―とつぶやく。

だからといって、私は高知の人たちが語ってくれる県民性が嘘だといっているのではない。それどころか確かにあると思っている。けれど今の私には、高知県民八三万人の相対的な平均値はそれほど興味のあることではない。それよりも、一人の主婦が、一人の小学生が、じかに語りかけてくれる言葉の方が何よりも大切なもののように思えるのだ。

私の仕事はそういう素敵な言葉を集めることだ。ところが、時々、「高知人」を防波堤のようにして、「どうせ、お前にはわからない」と拒まれるように感じる時がある。しかし、この広い世界で、高知の人が思うほどに高知は他県と違ってはいないと思うし、そんな違いは乗り越えられるものと信じている。

（朝日新聞記者）



高知市は文化の街か

関　みな子

高知市は文化の街ではない。

お前、正気か？、ぶんなぐられるぞ、という声が聞こえるが、ぶんなぐられても言わねばならぬ。これは大事なことなのだ。どうでもこうでも言わねばならぬ。

文化とは何か？。

文化とは世の中が文明になることを言う。自然を自然のままに放置せず、技術を通じて人間の一定の生活目的達成に役立たせることである（広辞苑、文化の項引用）。

その観点に立つならば、文化都市とは三つの柱が確立した都市をいうのであると私は考える。

第一の柱はスカトロジー。第二の柱はゴミの処理。第三は学問・芸術文化の柱である。

この三本の柱のうち、一番らくにできるのは三番めの学問・芸術文化であろう。歌舞音曲、美術、学術・詩文の文化であって、これは個人の努力による。見わたせば高知にもそういう文化人はわんさとおり、まず及第。もっとも学問・芸術の頂点を計るモノサシは無いので、これは各個人の精進によるほかはない。

第二の柱であるゴミ処理は、高知市は宇賀に立派なゴミ終末処理場を完成した。西日本一の規模であるという。毎週二回、必ずゴミ収集車が市内を回って市民が出す生ゴミを回収してくれる。不燃物ゴミは月一回、それぞれの係員方の迅速かつ誠実な作業によって、あとにはチリっぱ一つ残っていない。その姿は私には救世観世音の化身とも見え、思わず心の中で合掌してしまう。

のこるは第三の柱、スカトロジー。

スカトロジーとは化石学分野に属する「ふん石学」と、ふん便の民俗学的研究をいう。

などと小むずかしく言ったところで、そりゃ要するにウンコとおシッコの話、「ふん尿譚」のことではないか。人前で口にすべきことではないぞ、いくらバアサンだとて女だてらに何ごとだ、つつしみが足らぬとしかられようとも、黙ってつつしんでおればいつまでたっても文化都市は出現しない。

ジイサン、バアサン、大人に子ども、絶世の美男美女だとて、ウンコとおシッコ出さずに生きている者はない。出さずに生きておれるなら、それは人間ではなくてバケモノだ。

おらんくは床の間つきの広いトイレ、活花を飾って見事なもんじゃ、見にきてみいや、と仰せられてもそれは建築部門の話であってスカトロジーの本質ではない。スカトロジーとは排泄されたモノの始末がどうなっているか、そこのところを言うのである。

スカトロジーは人口の少ない砂漠の国では余り問題にせずともすむ。五〇年ばかり前のこと、内務省の役人であった兄がアフガニスタンへ運河をつくりに行ったとき、アフガニスタンの民家にはトイレというものがないので大小ともに砂の上にする。見わたす限り、目をさえぎる物のない砂の上で、小の場合はともかく、大の場合、同行のアフガン人は向こうをむいて見ないようにしていてくれるし、そのモノはかんかん照りの太陽の下で、たちまち干からびてミイラ状になってしまい、さまで目ざわりにはならぬというが、日本人には何とも苦痛で、たのんで宿舎には板囲いのトイレを作ってもらったという。この状態は半世紀たった今でも余り変わっていないらしい。

このようなことは、人口の少ない砂漠地帯であればこそ可能なので、人口密度と湿気の高い日本では到底できることではない。そこで日本の大多数の民家では住居の中にトイレをつくり、下へ便槽を置いてそれへして、いっぱいになるとバキュームカーに汲み取ってもらう。そして大多数の人々は、ここがかんじんかなめの所だが、汲み取られたそのモノのことを忘れ去ってしまう。空になった便槽をのぞいて安心して、又ぞろ毎日そこへして、満杯になればバキュームカーに汲み取ってもらうが、汲み取られたそのモノは消えてなくなるわけではないので、バキュームカーはそれを終末処理場まで運んでゆき、そこで処理されたのち、残る汚泥の始末までしなければならないのである。

日本が農業国であった時代には、便槽方式で汲み出して田畑の肥料にすることができた。今でも広い田畑所有者にはそれができる。ふん便には植物に対する有効成分が含まれているので、十分に腐熟して滅菌されたものは貴重な肥料になり得るが、腐熟されないものは危険である。

イ・イ戦争が続いているイランという国、昔はペルシャという名の文化の香り高い国のように私は想像していたが、イランの医学留学生ジャムシッド・ジャムシディさんの話では、イランのトイレは地面に掘った穴の上に階段のついた木の枠組みをつけた簡単なもので、彼が検査した一一〇人のうち七五人が寄生虫をもっていたという。

イランという国の文化を私は高く評価しすぎていたようである。イランは文化の国ではなかった。それが証拠にイ・イ戦争は数年間も続いているではないか。戦争の原因についてはよく知らないが、戦争というものほど非文化的な行為はないのだから、ジャムシッドさんの言う原始的トイレとイ・イ戦争は無関係ではないような気がする。きっとイランには下水道も「し尿」処理場も少ないであろう。イラクもそうにちがいない。

今から六〇年前、私は東京に住んでいたのでよく知っているが、当時の東京は年がら年じゅう道路を掘り返していて歩きにくく、市民不平の的であった。なんでこんなに道路を掘り返すのだろうと私自身も思ったものであったが、いま東京の公共下水道普及率は全国一である。公共下水道普及率とは行政人口に対する処理区域人口の割合のことで、高知市は全国下位のランクである。この調査は約一〇年前のものなので、現在はも少しよくなっていると思うけれど、他県市も向上しているであろうからこのランクは余り変わってはいまい。

地下下水道をつくるには非常に大きな費用がかかり、その他もろもろ、難事業中の難事業である。殊に人口が多くなってからの工事は不可能に近い。六〇年前、東京都が民衆の不平の中で道路を掘り返していたのは、あれは下水道工事のためであったと今にして思う。大きな先見の明をもった工事であった。それが半世紀後のこんにち、全国一の普及率となって現れている。

いま高知市は市街の隅々にまで目を向けて、開溝下水道整備に力を注いでおられるように思う。地下下水道に代わる次善の手段としてうれしいことである。

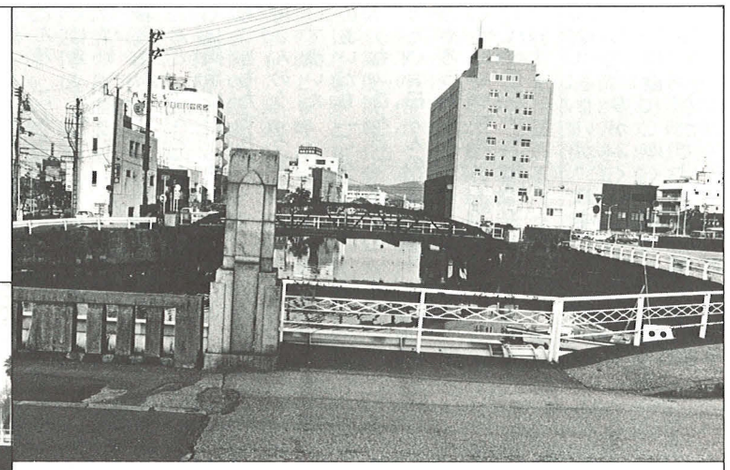
どうか高知市よ、さらに「し尿」の終末処理場の数を増してほしい。そして各民家の排水管をそれに連結してほしい。一日も早くその日が来るように、そのときこそ、わが高知市を文化の街と言うことができる。ゴミと「し尿」の処理法こそ、都市文化度のバロメーターであるのだから。

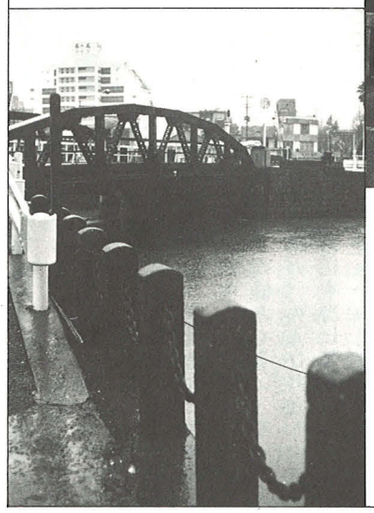
学問芸術の文化の花は、その土台のうえにさらに美しい香りを添えるであろうと私は思う。（草の葉同人）

私の風景

四ツ橋周辺

清岡　義道





かつては、東西に菜園場橋、幡多倉橋、南北に納屋堀橋、木屋橋と四ツ橋を形成していたが、納屋堀は埋めたてられて既になく、菜園場橋も幡多倉橋も刻銘は取りはずされて橋の名称もわからなくなっている。

風景のうつり変わりは実にはやい。

（昭和61年5月10日　撮影）

高知を訪れた留学生たち

細川志磨子

先頃、フイリピンの政権交代劇に際し、テレビで新旧大統領、国を代表する高官たちや一般民衆の喋るのを度々聞いた。日頃、聞きなれたアメリカ英語の発音や抑揚、調子等ともかなり違ってはいたが、れっきとした英語であった。フイリピンは七一〇九から成る島国で、八〇の方言、多民族国家で、種族間のコミュニケーションは、公用語でもある英語を使用している。公用語、共通語に英語を話している国は、東南アジアには数多くあり、それぞれ民族色豊かな訛りを丸出しにして喋っている。

私事で恐縮だが英語が少し話せたからだろう、積極的に働きかけたわけでもないが、いままで幾人かの外国人と接する機会に恵まれてきた。東南アジア諸国、オセニア、中南米、ヨーロッパからの来高者等々、なかでも、アメリカ人が一番多かった。

はるばると日本を訪ねてきた彼らのなかには、世界中をまわって活動している人たちもいた。コスモポリタンであり、広い視野でもって異文化に接してきた彼らから聞く、ロシア紀行、東欧紀行、アフリカ紀行などは、日本人とは違った角度の視点や受けとめ方があり、興味深いものがあった。国境が必要かどうかを考えさせられるのも、そんな時である。

そのなかでも、高知を訪れた留学生たちに会う機会が多い。申し訳ないが、私自身が直接に手をかけ、時間をかけてお世話するのではない。留学生たちのホスト・ファミリーを探して欲しいという相談を受け、知人の適当な家族を紹介したりするのだが、種々の事情から私自身は引き受けられないでいる。

私の出来ることは、女子留学生たちとの気軽なお喋りの相手を勤めることである。それも、快く受け入れてくださった知人宅で、心のこもった手作りの夕食の場で（度々提供していただいた上で）のことではあるが。ご馳走を前にすると、双方共にくつろいで幸せな気分にひたる。大体において、彼女たちはお喋りで快活である。高知で学んだ事を国へ持って帰り、その道のリーダーにならんとしている。あまりにも進みすぎた技術やお金のかかる設備を必要とするものは、彼女たちの手にはおえない。保守的な年長者を相手に、改良、改善と言っても、すぐには改革できないなど、彼女たちの悩みはつきないが、お喋りをしているうちに、夢がふくらみ、陽気でユーモアに溢れてゆく。明かるく楽しい雰囲気のなかで、彼女たちと共に語り、話に夢中になって時間の経過を忘れるのである。

彼女たちと話していると、国家というものを考えさせられる。彼女たちの背後に存在する目に見えないものが、それぞれの影を引きずっている。軍政あり、混乱あり、戦争ありで、日々の生活の貧しさにとりかこまれた上での悩みも多い。海にかこまれた日本の、のんびりとした自分たちの毎日に本当に驚くことがある。

フィリピンから日本茶の栽培に来ていたロリータが言ったものだ。

「山間で元気な高齢者が多く働いている。きっと、お茶を飲むせいで元気なんだ。お茶にはビタミンCが沢山含まれているから長生きできるんだ。

私の国では、お茶は沢山野生している。木からちぎって、煮るだけで味も香りもないお茶だ。なんとか日本茶の良いところを学んで帰りたい」

フイリピンから来たイメルダは、お世話になった人たちの別れの宴で、「たまありますもんか、私を受け入れてくれて、ありがとう」と、お礼を言った。

素朴な彼女たちの陽気な笑い声にひかれて、多忙な日常から抜け出して、今度会う機会を何時にしようかと、思うのである。

（高知県立図書館　主監）

こんど　こんど

江陽小学校　三年　千頭教世

このあいだ　お母さんといっしょに
スーパーへ行った
「お母さん　チョコレートこうて」
「こんど　こんど」
ぼくはきょうはこうてくれると思うて
スーパーへついていった
「お母さん　チョコレートこうてや」
「こんど　こんど」
ぼくは両手にいっぱい
にもつをもたされて
お母さんのうしろを
ついて歩いた
このあいだも「こんど」
きょうも「こんど」
いったいお母さんの「こんど」は
いつやろうと考えた
ぼくはにもつを持つために
スーパへきたがやないに……

桂浜とタタキ

岡本純一

四国が島でなくなる。昭和六二年度の完成をめざした本四架橋の一ルート、瀬戸大橋はその威容を私達の目の前に現わし始めた。

この橋の完成は、四国であると言う前提を取り払う歴史的に大きな役割を果たすと共に、架橋新時代を拓き、経済・交通・生活などに与える有形無形の影響は、まことに計り知れないものがあろう。

よく東北人、九州人とかは言われるが、〈四国人〉と言わないのは一体どうしてだろう?。地理的あるいは風土的条件の相違とも思われるが、「瀬戸内圏構想」と言った活字がマスコミで流れ、〈四国一体化、県際化〉なる言葉が脚光をあびる今日においても、特に土佐人は黒潮踊る太平洋を背にうけ、良きにつけ、悪しきにつけても特有と言える〈おらんく〉意識が頭を持ち上げるからだろうか……。

ともあれ、本四架橋の完成後は、否応なしにあらゆる方面における流れは確実に変わる事が予想され、その中での四国——本県の的確な位置づけというものがクローズ・アップされているわけであるし、変化と同時に可能性にも対応していかねばならない時が来たように思う。

ここ数年、青い国—土佐を訪れる観光客の数は横ばい状態が続いているが、本四架橋完成後はマイカーあるいは観光バスによる観光客が増加するであろう。ところが、高知市内の、特に高知城周辺を含む中心地の観光地は駐車場の不足が著しく、このことが論議されるようになってからいく久しい。他県の観光客は、有名な観光地の周辺には公営や民営で、ある程度の収容力をもった駐車場があるのが〈あたり前〉という感覚で訪れている。しかし、高知に住む者には、高知城周辺に駐車が出来ないのが〈あたり前〉である。この感覚の違いは、観光土佐としては見過せない。が、その対応の一つとして、高知の観光の目玉、歌で名高いハリマヤ橋の近くに、本年から高知市の都市計画事業として中央公園地下駐車場が具体的計画に入ったことは喜ばしい。

桂浜、龍河洞、室戸、足摺岬などの観光資源は、それなりの雄大さや美しさを人々に与えてくれるが、しかし、自然が売り物だけでは人を呼べる時代は過ぎ、今は、観光の中身が問われる時代だ。少し無理をすれば海外にまで足を伸ばせるのである。観光産業が大きなウエイトを占める本県においても、プラス・アルファの魅力を、訪れる人々にアピールする〈味つけ〉の演出が大切であろうし、こうした意味から〈桂浜とタタキ〉だけではもう古いのである。

県下の中小・小売業界は、本四架橋、高度情報化時代にいちはやく突入した業界とも言える。県都、高知市の顔とも呼ばれてきた帯屋町筋商店街も、全国レベルで広がった中心商店街の熟成化が避けられず、大きな転換期にさしかかっているのである。こうした現象については、昭和四〇年代の後半から始まった大型量販店の急速なチェーン展開、商店街の近代化、消費者行動の変化などなど、様々な要因があろうが、明確に言えるのは、商店街の機能そのものの変化である。単なる買物の場から、ゆとりと憩いのある街としての機能を兼ね備えなくてはならなくなった。〈ショッピング・プラス・アルファ〉の時代である。

このために、私達は、中心商店街の活性化を目指し、カラー舗装やアーケードなどのハード面での環境整備事業、また、土曜夜市に代表されるソフト面でのイベント事業など、ハードとソフトの両面から、中心商店街の再生をかけ、共同事業に取り組んできた。〈個性ある街づくり〉、〈楽しさと出会いのある街づくり〉の実現のために解決しなければならない問題がまだまだ山積している。

昨年の夏、中小企業事業団と県・市の協力を得て、中小企業大学の実習生による広域診断及び高知市商店街診断の機会を得た。この診断は、新しい時代に対応した街づくり、商店街の活性化に向けての諸問題を把握すると共に具体的な改善策などを提案したものであったが、そのサブ・タイトルが「城を出て攻めよ！土佐商人」である。このサブ・タイトルは、中心商業街区を構成する私達、中小・小売業者のなかに、いまだに根強く残っている〈桂浜とタタキ〉的経営感覚からの脱却を示したものではなかろうか。〈城を出る〉ということは、単に積極的経営戦略だけを意味するのではなく、その前提として、経営意識の改革の必要性を求めていると感じるのは私一人だけではないだろう。

新しい波は本県が独自に育んできた経済、文化、生活様式などに大きな変革をもたらさずにはおかないだろう。もう既に侵略は始まっているのである。

（帯屋街筋協同組合理事長）

私の自然（四）

山脇哲臣（題字 文 写真）

六月一〇日頃、長い間の念願だった県外の湿原へ行ってきた。この湿原は最近急に宣伝されはじめたようで、昔はあまり名を聞くこともなかった。一昔前ならば汽車で、そしてバスがないところは歩いて行った。大変なことだったが、今は車があるからまことに有難い。実はこの湿原は匿名のまま書いても差し支えないと思ったが、ここまで書いて来て翻意（ほんい）して実名を書くことにする。池田町の黒沢湿原である。車の有難さと共に、この頃は地図にもない道路が大抵のところへは通じていて、行けないところはない。場所によってはドライブに来たのか、山へ登りに来たのかわからないところさえある。黒沢湿原も陸測の地図にはそうと書き入れてないが、池田から入って山道にかかると案内板が次々と立っており、その通り運転してきたら難なく湿原についた。道と車と、最後に自分の退職後にとった運転免許に大いに感謝しなければならない。

おかしなことだと思うけれど、現在の私の自然は考えようによっては、運転免許と共にある。この事は私だけではないと思う。多くの自然愛好者も同じことではないだろうか。私は運転免許を取ると同時に、自然とのふれ合いの免許をも取得したことになる。それがなかったら、なかなか自由に自然の中へ行くことはできない。行けない自然は、私にとって無縁のものにすぎない。町の中で許される自然らしきものは、せいぜい日曜市でサギソウやウチョウランなど買ってきてたのしむくらいの事である。幸いすむと人のいう山の彼方の空の下へ、車があれば何の苦もなくすぐ行ける。反自然の象徴的な存在の車の上に、自然が乗っかっていると思うと、まことに皮肉なことだ。植村直己だって身につけた近代装備がなければ、あんな大冒険はできなかっただろうし、どう転んだって私達の考える自然は、近代文明からみた自然であって、本当に私達が自然の中にいることが可能であれば、自然の認識すら生まれてこないはずだと思う。

悪い癖で話が少し脱線したけれど、幸い私の車は脱輪することもなく黒沢湿原についた。標高五〇〇メートルあまりの峠を越すとそこがもう湿原で、驚いたことに出来たばかりの喫茶店があり、その下に駐車場もできている。その駐車場に車をおいて、まず湿原をみることにする。湿原といっても、いたる所で畔であったとおぼしき段々がみえるから、つい最近まで水田であったにちがいない。高冷地の米は美味なはずだけれど、どうも地味がよくないとみえて、米の栽培制限と共にいち早く放棄してしまったものらしい。そのあとにアシが侵入して一面のアシ原となっているが、アシの緑は人の丈ほどにもまだ伸びてはいず、それより高く昨年の枯れた稈が白々と立っている。

その中を尾瀬のように板を渡して、湿原の中を歩けるようにしてくれている。幸いに雲一つない晴天なのに、私達夫婦以外は一人もいない。平日なのと、入梅宣言があったため、人々が登山を警戒したためであろう。おかげで人の混雑に気を散らされることなく、ゆっくりカメラも使うことができた。雨が降らないものだから水の少なくなった溜りに、ヒツジグサが咲いたり、ヤマドリゼンマイの小さな群落があったり、ごくまばらにトキソウが咲いていた。思ったより小さい湿原で、時期が悪くて花が少ないのは少しがっかりした。秋にもう一度出直して来なければと思ったりした。

湿原の中は板を渡してくれなかったら歩けない。黒沢湿原の板は尾瀬より板一枚分広いので歩きやすい。いつか尾瀬の板を渡っていると、後に続いた人が声高に話しているのが聞えた。「こんなによその山の木を切って自然を破壊しておいて、ここに板を渡すなんて怪しからん」というような意味のことであった。その頃は自然保護の運動が澎湃（ほうはい）と起こりつつあるときであった。自然保護は確かに錦の御旗的なところがなきにしもあらずで、それに真正面から反対することがはばかられるようなところがあった。私はそういう怒りの言葉を背後に聞きながら、なにかその人の独り善がりのような気がしてならなかった。それ程尾瀬に渡した板橋が嫌なものなら、わざわざ尾瀬まで来てその上を歩かねばよいのにと思った。この人は板橋があるから、仕様なしに腹を立てながら板橋の上を歩いているのだろうか。でもこの板橋は人が押すな押すなとくるからつけたものである。

そういう私も石鎚のスカイラインができてから、面河の旧道を歩いたのは、テレビ高知のスタッフと共に歩いたのが一回だけである。石鎚山の上から眺めた面河谷は、昔はひどく深かった。しかし工事が始まると共に、その谷に大きな疵（きず）ができた。石鎚山から眺めるにはまことに惜しい山肌の疵であるが、登るにはまことに便利な道である。道からは車が進むと共に石鎚山の美しい姿が刻々と変化してよく見える。この道で面河の渓谷に大きな疵をつけて、惜しい事よと思いながら、その道を自動車を運転しながら登る。そうしてあたふたと石鎚山の山頂を極めてその日のうちに高知へ帰る。長澤からシラザ峠・シラザ峠から石鎚と歩いた昔が夢のようである。私の石鎚山の自然鑑賞権は、自動車免許と共におりている。

黒沢湿原の板橋を歩いているうちに、サギソウの栽培地があった。昔この湿原にはあの白い花のサギソウがあったそうだが、取られてしまったので、その復元を愛好者達がはかっているのだという。私はふとその時、陸軍二等兵であったころ兵庫県の青野ガ原の陸軍演習場内でみたトキソウのことを思い出した。トキ色をした水湿地の野生蘭で、実に可憐だった。あそこも演習用地でなくなった今は、トキソウも取られてしまったのではないだろうか。そういえば一時随分とトキソウが売られていたことがあった。青野ガ原のものだったのかも知れない。見覚えがある、ような気がした。これらの可憐な花達を保護するには、軍の演習地にするのが一番よい方法であるのではないかと、この元帝国陸軍伍長殿は思う。でも今はこんな湿原でも平気で動く戦車があるから、湿原の上で戦車戦の演習でもされたら、それこそ植物達は潰滅的打撃を受けることになるだろう。私が短期とはいえ現役兵のときには、朝倉の連隊に爆薬をキャタピラの下に投げ入れる練習用の動けない戦車が一台おいてあっただけだったし、青野ガ原でも演習中戦車をみたことはなかったので、将兵達のはげしい演習とは無縁のように、演習場の一隅に湿原植物群落が保存されていたのであろう。

物部村岡ノ内　行場の滝

黒沢湿原の板を歩いているうちに、これはと驚いて足を止めたところがある。ハマユウを植えてあるのである。ハマユウは海岸の植物で、こんな山奥の湿原に自生しているものではない。私はこんなものをみるとひどく違和感を持たされてしまうのである。もう一つ気になることがある。園芸種の日本ハナショウブと共にアメリカから帰化したキショウブを植えてあるのである。私は、黒沢には野生のハナショウブの原種であるノハナショウブが咲いているのではないかと思って来たけれど、その期待は外れてしまった。栽培種のハナショウブは自然ではないとしても、まだ許せるが、黄色のハナショウブはセイタカアワダチソウのように繁殖力が強い。大川筋がカルキで悪臭ぷんぷんの頃、それに耐えて咲いていた。それは汚れ切った川にとっての救いだったが、香長平野では用水路を塞いで困っていた。潮来ではマユモの中に咲くのは、しおらしい紫のアヤメ（？）ではなくて、キショウブばかりになっている。黒沢湿原も、アシの間はキショウブが優勢になり、他の可憐な花達は片隅へ追いやられる。

自然は産業になった。美しい自然は観光という産業になる。観光はより多くの人を集めるために、自然のバランスを無視して、より美しくする方向に力が働く。私は池田町に、ハマユウは黒沢湿原の自然をまもるというにはあまりにも突飛すぎ、キショウブはふえすぎて困りますよ、そしてそれはもはや自然とはいえなくなりますよ、と言った方が親切になるのか、おせっかいになるのか、どうしようか迷っている。

都市問題論文
「市政研究」から（三）

別冊市政研究（昭和三五年一二月）
漁村部落—高知市長浜の場合—　粟津龍智
第六号（昭和三五年三月）
高知県および高知市産業構造論—欠陥並びに弱点の所在と是正振興策—　高橋幸吉
高知県製材業の実態と動向　高知県産業経済調査会
高知県農村の変貌過程—安芸郡白髪村落と高知市布師田村落の比較研究—　二宮哲雄
高知県の観光に関する諸問題—観光資源と観光客について—　山崎修
第五号（昭和三四年三月）
高知市におけるし尿処理計画について　洞沢勇
高知県農業発展の路線　梶原子治
木材工業の集団化　松島哲也
高知県機械漉紙業の実態　高知産業経済調査会
農業地帯の都市化過程　粟津龍智・山崎修・二宮哲雄
高知市内未解放地区の考察　大橋薫
社会福祉問題としての母子家庭—高知市内の調査から—　大橋薫
地方自治体と住民意識—高知市民の世論調査—　二宮哲雄・芳野勝
第四号（昭和三三年三月）
高知市総合調査を省みて中沢誠一郎
高知市都市計画の問題点川名吉衛門
観光に関する概論的諸問題（附）高知市附近の観光地について　山崎修
高知県開発財団への期待と批判—高知市の発展への寄与を中心として—　高橋幸吉
歴代市長と市政点描　平尾道雄
高知文化の歩み—三五年の回想—　阿部孝
都市の親族関係—高知市の調査資料を中心として—　大橋薫
第三号（昭和三二年三月）
地方都市の流動人口とその構造　稲見悦治
高知市における商店街の諸問題—愛宕町商店街の実態調査—　山崎修
街路市の実態調査について—顧客調査より見た日曜市の場合—　西甸
高知市商店の実態　有沢貞雄
高知市の世論調査　大道安次郎
仮小屋生活者の実態　大橋薫
地方史私言　平尾道雄
市庁舎建築の新しい考え方について　秦泉寺正一
第二号（昭和三一年二月）
高知市営住宅とその住民—実態調査に基づいて—　有沢貞雄・毛利孟夫
高知県主要物資流通状況について　伊賀一人
高知市周辺の蛇紋岩資源　沢村武雄
電力事情よりみた高知市の工業発展性について　四国電力㈱高知支店電力課
瀬戸川、地蔵寺川分水、鏡川流量増加の構造　松山巌
第一号（昭和三十年一月）
都市計画の立場から見た高知市　石川栄耀
高知市における地域社会の実態　毛利孟夫・有沢貞雄
保育所に関する諸問題　大野武雄
高知市の農業経営　久保佐土美
市場考　大野勇
高知市周辺の石灰資源　沢村武雄
私の見た高知市の観光　三宅清水
公企業経営について　島崎孝彦
高知市における行政機構について　渡辺進

学校通信「南風」

大原二三男

「あたたかく、やさしく、たくましく、南から吹く風、そのように南海中の気風を高めたい」という願いと祈りを込めて、昭和四三年一一月一日、時の校長吉本愛博氏は、学校通信「南風」を創刊した。以来一八年、世は移り人は変わる中で、今なお発行され続けられている「南風」、半紙を二つ折りにした四ページ建て、週一回、ガリ版刷りも創刊当時と同じである。

「南風」は四月の新学期と共にスタートを切る。岡本弥太の「桜」の詩を間奏に南海中を去っていく先生、そして新しく仲間となる子どもたちや先生たちの言葉、「南風」を読む子どもたちの教室の窓辺にも桜の花びらが散り交う。五月、二八名のいとしい子たちが瀬戸内海に帰らぬ人となった紫雲丸遭難事故、あれから三一年、遺族や関係者の悲しみは消える事なく、返信欄は悲しみに、そして、記念碑は五月の草花で埋めつくされる。

こうして「南風」は、学校内外の出来事や子どもたちの様子、父兄からの返信の記事等で休むことはない。

「何か書きたい、何か書こうと心の中で感じている。『南風』を読んで何か不思議な感動が心を揺ぶる。何か書きたい、何か書こうと…。何か分ってもらいたい、何か感じとってもらいたいと思う『南風』の心が一字一字子どもにも親にも十分感じられる。わが娘転校三日目、母と子が必死に生きている。これからも『南風』楽しみに待っています」（八二五号への返信から）

子どもたちと父兄の返信に支えられて、今日もガリ切る音が職員室に響いている。

（南海中学校教諭）
連絡先　電話㊷3291

チャーチル会・高知

大川　勉

チャーチル会とはチト奇妙な名前であるが一体何の会だろうか、と疑問をおもちの方もいると思いますが、趣味で油絵とか水彩画とかの洋画を描いている素人画家、いわゆる日曜画家の集まりであります。

第二次大戦英国救国の大宰相として令名高いウインストン・チャーチルは、激務の余暇に絵をかくことを無上の楽しみとし、その腕前も中々のものであったことは有名であります。

第二次大戦に敗れた日本は一億総虚脱の状態にありました。この苦しみから何とか立ち上がろう、それには心に潤いを。その手段として絵を描いてみようとの発想のもとに、横山隆一氏等銀座文化人数人の発案により昭和二四年チャーチル会・東京が発足しました。

チャーチル卿の名を拝借するとは流石にしゃれたものです。こういう主旨のもと昭和二七年六月五日、チャーチル会・高知が結成され、故中村博画伯のアトリエにおいて月三回（金曜日）の人物、静物作画、並びに第一日曜日の野外写生会を実行し、三四年間連綿と続いて今日に至っています。

趣味として絵を描きつつ、県美術館建設基金のためのチャリティー展の開催、あるいは福寿園その他への作品寄贈等の社会活動も行なっています。紳士淑女なら誰でも入会出来ますが、プロと無職の人は駄目（ただし主婦は職業と認む）です。

ただ今満員（一二六名）、空席なし。

（チャーチル会・高知　会長）
連絡先　中村方　電話㉓2811

高知昆虫研究会

浜田　康

高知昆虫研究会は、昭和二七年二月一〇日にそれ迄の土佐昆虫同好会が発展的に解消して、発足いたしました。

終戦後、昆虫の研究が再開されると、高知の昆虫相は未開地として、多くの研究家たちの注目を集めました。これは高知に昆虫愛好者や研究家が居なかったわけではなく、多くの人材を戦前にも輩出しておりますが、何分にも広大な土佐の自然を前にしては中々手が回らなかったのが実状でしょう。戦後は多くの方々がそれぞれの立場で研究を再開してこられました。この方々が一堂に会して昆虫研究会の発足となったのは当然の帰結といえます。以来三〇年余り高知の昆虫相の解明に努力を重ねて来ており、その成果は機関誌「げんせい」に発表され、県内外で高く評価されております。

昨年からは、会の方針として一つ一つの山を重点的に調査を進めることにし、まず手はじめに大豊町にある工石山を調査し多大の成果を得ました。また、本年は西日本科学研究所からの依頼による仁井田、種崎地区の昆虫相の調査と、会本来の計画である物部村の楮佐古川流域の昆虫調査を進めております。

一つの山の調査がわずか一年で結果が出るわけではありませんが、次第に自然が失われる中で、少しでも多くの地域の昆虫相を把握しておくことが大切であるとの考えから調査を進めています。

自然環境を知る上においても昆虫相の調査は大切で、会としてもなすべきことが山積しております。ご支援、ご協力をよろしくお願いします。

（高知昆虫研究会員）
事務所　竹東方　電話㉒5094

メルヘン'80

植田　省三

大人のための童話の朗読と、身近に音楽を聞こうと、昭和五五年（一九八〇年）三月からメルヘン'80をはじめました。客席五〇の小さな空間は、出演者と観客を、観客と観客を肌で感じることができます。

文化は生活のなかに根づいていなければならないということで、毎月二日間公演することを続け、今年の七月で七五回となります。毎月というのは大変ですが、毎月だから続けてこられたと思っています。

朗読というのは、手軽に出来る利点をもっていますが、言葉だけで表現するというのは実は大変なことなのです。日本人は、言葉を理解したら満足してしまう傾向をもっています。しかし、理解した言葉を相手に投げかえすという往復活動がなければ言葉は発展しませんし、人間の豊かさも生まれません。童話を朗読する場合、作者の意図をしっかりとつかみ観客に伝えなければなりませんが、朗読者によって表現したものは、様々に個性をもって現れてきます。それは、同じ楽譜を演奏した場合、演奏者によって音楽の印象が相違するのと同じです。私たちは、生活のなかで言葉を使用していますが、その言葉の使い方（表現）によって、人間関係を豊かにしていたり、貧しくしていたり、していることに注目すべきです。

音楽の方は、地元の音楽家を中心に演奏してもらっていますが、私たちはもっと身近に居る演奏者を大切にしなければならないと思います。

（劇団棧敷　代表）
連絡先　電話㊹1362

風伯

新瑞山像

日本人の銅像に対する観念は、これを日本的というのだろうか、大方のものが晴着姿に近い正装が多い。横浪スカイラインに建てられていた武市瑞山像は、いかつい肩と顔が特徴的というより多分にカルカチュア風に見られていたので、すこぶる不評判をまねき、とうとう取りつぶされてしまった。銅像としては近頃もっとも寿命の短いものであった。

ところで先日の新聞紙上に、多分替えの銅像であろう、新瑞山像の写真が出ていた。やはりこれも正装であり、前者の例しを恐れた為か、いかにも童顔風の自然態と身受けられた。今度の作者は吉田茂像を造った人とのこと、まあ、どんなによく出来ていても何がしかの批判はあるものである。大ていは注文主の意向によることが多いわけだから作者も気にすることはないが、写真で見た原型の感想を言わしてもらうと、顔に今少し厳しさがただよっていてもよさそうに思える。瑞山には、最もその心象をよく現したと思える獄中自画像があるので、これが唯一の手本と言える。小子などはむしろ維新の悲劇の代表者としての瑞山像にこそ彼の偉大と気質を見る思いがする。必ずしも正装でなくても獄中像でもよいように思う。あの獄中像に泪し、賛嘆する人はあっても、決して不浄を思う人はいない筈である。そうした真実がいちばん人の心をとらえるのではないだろうか。ただ大刀を差して威張っている形だけが瑞山像の特質を現しているとも言えないのである。

（旧人）

都市美づくり

待望の天神大橋が落成した。一年八カ月余りにわたって不通になっていただけに、市民は大よろこびである。この橋は歴史的に由緒がある。古くは鏡川に架設された唯一の橋で、高知第一の大橋であったことから、俗に〝大橋〟と呼ばれていた。明治三六年に下流の潮江橋ができたのを機に撤去され、一時仮橋が設けられたが、大正一四年コンクリート橋がつくられた。今回のものは昭和三三年に建設された旧橋の老朽化に伴い、架け替えられたものである。

朱塗りの欄干の映える新しい橋は、うるおいと個性と景観美にすぐれた都市づくりの一環として、高知市都市デザイン委員会の論議を得てつくられたもので、市のそうした意気込みを示す第一号である。全体の出来映えは、周辺の風景ともよく調和し、白い人造石で舗装された歩道もゆったりしており、歩いて渡るにも楽しい橋になっている。ここは本誌前号の巻頭に、横山市長が書いているように、夕陽の眺めの美しいところである。

鏡川には、鏡川大橋、潮江橋、そしてこの天神大橋と、個性のある橋ができた。いま県が工事中の新月橋も、その出来上りが期待されるところである。

都市の景観づくりが、こうして前進していくことはうれしいことである。しかし、まだまだその取り組みは強めていく必要がある。これを機にさらに積極的な都市美づくりが、総合的に推進されることを望んでおきたい。

（青）

高知レポート 創刊

財団では、郷土に関する各種研究や報告書、提言など、社会、市民生活の基幹となる情報について、タイムリーに高知レポートとしてまとめ刊行してゆきます。

高知レポート1
「明日を創る」―高知市・都市づくりへの課題と展望―

高知の人間は議論好きであるといわれます。特に近年は中心市街地や高知駅周辺の再開発、あるいは商店街の活性化、中央公園の地下駐車場化、旭地区の再整備等いくつかの具体的な問題もあり、まちづくりに対する論議が盛んです。

こうした議論を聞く機会が多いのですが、いつもゼロからの出発的な会が多く、堂々巡り、あるいは空回り議論といった感すらあります。

一方ふり返ってみると、これまでに高知のまちづくりにかかわる数多くの計画書や提言があります。こうした計画書や提言は、これまでに高知に集まったまちづくりに対する知恵と知識であり、それは私たちの財産と考えてよいと思います。

まちづくりに対する議論も、こうした過去に蓄積された財産を有効に活用する必要があります。まちづくりは過去の計画書や提言を踏まえ、高知を総合的に把握し、未来を考えること、そして、それら議論の積み重ねの上にたつ実践が必要です。

したがって、本書は、高知にかかわるこれら計画書・提言にはどのようなものがあり、どんな内容（課題や考え方・方策）が書かれているのか、また各々の計画のテーマは何なのか、といったことをまとめ、今後の高知市の新しいまちづくりを考えるための資料として役立つことを期待して企画したものです。著者は、若竹まちづくり研究所（代表大谷英二）の皆さんです。

本編は一一章から成り、県下の一七の代表的な計画書・提言を取り上げて紹介・解説しました。また、全国的な視野から高知の将来を考えるために、特に資料編をつけ加えています。

■ 全体構成

- 都市レベル
  - 総合計画（第1章）
  - 交通計画（第2章）
  - 公園・緑地計画（第3章）
  - 景観計画（第4章）
  - 防災計画（第5章）
  - 公害防止計画（第6章）
  - 観光計画（第7章）
  - 文化振興計画（第8章）
  - 産業振興計画（第9章）
- 地区レベル
  - 都市再開発計画（第10章）
  - 地区計画（第11章）
- 資料編
  - 1．戦後の国土開発計画の流れ
  - 2．過去の全国総合開発計画
  - 3．『四全総』の課題と方向
  - 4．高知市の都市づくりの動き

明日の高知づくりのために各界、各層の市民の皆さまにご一読、ご活用いただくことを期待しています。市内書店または財団でお求めください。

定価一〇〇〇円

B全ポスター

土佐方言 一万五千語―高知県方言辞典 全語収録

てんこもり おらんくごとば

好評発売中！お求めは書店もしくは財団まで

定価800円

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目二番三号
TEL（〇八八八）㉓四三六五
郵便振替 徳島8-14869

活弁活動大写真

往年の活動写真弁士、池俊行氏を迎えて無声映画の醍醐味と貴重な数々の思い出話を聴く会!!

池俊行氏
シナリオ・ライター
プロデューサー
小説家・随筆家
高知市出身

プログラム

1．沓掛時次郎 40分
主演：大河内伝次郎
日活、昭和4年作品

2．黄金狂時代 80分
主演・脚本・監督
チャールズ・チャップリン

7月18日(金)午後6時から
（開場5時30分）
高新文化ホール（高新放送会館7階）
前売券1,000円 当日券1,200円
前売券は高新プレイガイド、県民文化ホール、財団で発売中